

歌舞伎の発祥は、京三条における出雲の巫女「阿国」が慶長8年（1603）に始められたと伝えられていますが、それから20年後には早くも江戸にて歌舞伎が始まります。

寛永元年（1624）、猿若勘三郎（初代中村勘三郎）が、中橋新地（現在の京橋一丁目周辺）で猿若座（後の中村座）の櫓（やぐら）をあげたのが江戸歌舞伎のはじまり。

寛永9年（1632）に中村座は禰宜町（現：人形町）に移転し、慶安4年（1651）には上堺町、さらに下堺町へと移転した。また、寛永11年（1634）には村山座（後の市村座）が上堺町（後の葺屋町）で、寛永19年（1642）には山村座が木挽町（現在の銀座近辺）で、万治3年（1660）には同じく木挽町で森田座（後の守田座）が櫓を上げて歌舞伎の興行をはじめた。

寛文元年（1661）に、中村座のある堺町、市村座のある葺屋町、山村座と守田座のある木挽町以外では、歌舞伎の興行は禁じられ、この四座が官許の芝居小屋として歌舞伎の興行を行った。

中でも現在の日本橋人形町三丁目にあたる堺町・葺屋町は歌舞伎のほか人形浄瑠璃の興行も行われ、一大興行地として隆盛を誇った。

元禄年間（1688～1704）には、江戸と上方で歌舞伎の最初の隆盛期を迎え、数多の名優たちが活躍した。江戸では荒事（あらごと）を創始した初代市川團十郎、江戸和事の名手であった初代中村七三郎、実悪（じつあく）の山中平九郎などがこの時期を代表する名優である。

正徳4年（1714）、七代将軍徳川家継の生母・月光院に仕える大奥女中の絵島（江島とも）が増上寺などの参詣の帰途に山村座で芝居を見物し、宴席に人気俳優の生島新五郎を招いたことが発覚し、絵島、生島をはじめ関係者は厳罰に処せられ、山村座は廃座に追い込まれた。この事件により、江戸の官許の芝居小屋は、中村座・市村座・森田座の三座となり、以後、明治期までこれが守られる。また、江戸三座は、老中水野忠邦による天保の改革で、天保13年（1842）に浅草へ強制的に移転させられ、浅草猿若町で興行を行うこととなった。

明治5年（1872）に守田座（後に新富座と改称）が浅草から新富町に移転し中央区に劇場が戻ってくる。それを松竹合名会社を買収し興行主となる。そして、歌舞伎座は、明治22年（1889）には東京日日新聞社（毎日新聞社の前身）の主筆兼社長で、演劇改良運動にも意欲的であった「福地源一郎（桜痴）」が中心となり開場することとなった。さらには、大正3年（1914）には、大谷竹次郎が歌舞伎座の社長に就任していきます。歌舞伎座が開場し、以来120年以上にわたって歌舞伎の興行を続けている。

現在の歌舞伎座は、明治の第一期歌舞伎座から数えて五期目となるもので、劇場内外がバリアフリー化されているなど21世紀の劇場ならではの特色を持つ。そして歌舞伎座ギャラリー、屋上庭園などの新施設も併設。日本文化を発信する拠点のひとつとなっている。

以上